



脚本 にいの ゆうひこ
絵 しもかわら ゆみ
製作 公益社団法人「小さな親切」運動本部

まっりのひ

ここは、海の近くの静かな村。

たくさんのどうぶつたちが暮らす動物村に、
新しいお友だちがやってきました。

—— ゆっくりとぬく ——

◆子どもたちから
「海だ!」「家がある」「学校だよ!」
など景色に対する反応があった場合は
「そっだね、海」と
指さして肯定し、
親しみを持てるようにしましょう。

この紙芝居は、子どもたちが親しみやすいよう動物を登場人物にしていますが、実際には被災地の方々にお話をうかがい、本当にあったことを取り入れて製作しました。

東日本大震災が起きてから約5年が経った現在の状況を知ってもらうとともに、苦悩や困難を乗り越えていく姿、地域を愛する心を自身に投影し、自分たちの日常生活の中に活かしてもらえればと思っています。



先生 「みんな、新しいお友だちです。

じゃあ、じしじょうなかい自己紹介をしてもらいましょう」

キュウスケ 「キュ、キュウスケです。よろしくおねがいします」

ゆうき勇気をだしてあいさつをするよ、

クラスみんながいっせいに

「仲良なかよくしようぜ」

「あそぼうね」

と声を返してくれました。

キュウスケ 『ああ、よかった。これなら大丈夫だいじょうぶそう』（心の声）

人と話するのが苦手なキュウスケは

少し、ほっとしました。

—— 2／3引きぬく ——

◆キュウスケは人見知り。緊張きんちやうしている感じ

◆緊張きんちやうが少し、とけた感じ



放課後、男の子が話しかけてきました。

「タロー はじめまして。ぼく、」タローです。
よかったら村を案内するよ」

キュウスケはちょっとあわてましたが、
「タローの笑顔を見て、安心しました。」

キュウスケ 「どうもありがとう。いいの？」

「タロー」もちろん。早くこの村のことを知ってほしいからね

そこへ、別の男の子が通りかかりました。

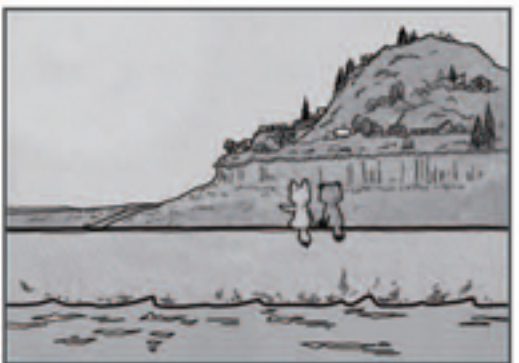
—— ぬく ——

「タロー あ、ポンタ。キュウスケを海に案内するんだけど、
いつしよに行へ？」

ポンタ 「じゃあ、今日はやめておへ。
キュウスケ、ポンタです。よろしくへー」

キュウスケ 「じゃあじゃあよろしくへ」

—— ぬくくくくぬく ——



キュウスケは「タローといっしょに
防波堤までやってきました。

つなみのせいで、一部が壊れています。

「タロー「あそこをみて。高いところには家があるけど、

低いところは何もありませんよ。」

キュウスケ「本当だ。どうして？」

「タロー「あんなところまでつなみがきたんだ。

たくさんの家があったんだけど、

つなみでみんななくなっちゃった」

キュウスケは目をみはりました。

とても家があったように思えません。

「タロー「ポンタの家もここにあったんだ。

だから海がこわくてきらいになっちゃったみたい。

前みたいにいっしょに魚つりに行きたいのに…」

ぬく

◆おぼろいだようす



キュウスケ 「コタローは大丈夫なの？」

コタロー 「うーん…本当は、あまり大丈夫じゃない。ぼくもつなみに流された時の夢を見るし、大声で叫びたくなるときもあるよ。でも…」

(少し 間をおく)

コタロー 「つなみなんに負けていられるかって感じ」

キュウスケは、転校で悩んでいた自分とくらべました。

キュウスケ 「なんか、かっこいいね」

コタロー 「あはは。それで、新しい学校はどうだった？」

キュウスケ 「おともだちが多くておどろいたけど、みんな親切でうれしかったよ」

コタロー 「じいじは、つなみのせいで3つの小学校が1つになったんだ。学校の中が急に変わって、はじめはどきどきした。だから、みんな君の気持ちができるんだよ」

と、そくへ

—— ゆっくりに ——

◆照れたように

◆少しさびしそうに



おじさん 「お、見かけない顔だな。転校生かい？」

キユウスケ 「は、はい」

おじさん 「この村はいつにもたつこい。

そうだ。これをもっといへといひ。

この村のいちいはいつてもおいらといひ」

キユウスケ 「ありがとうございます」

おじさん 「どういたしまして。とにこんで」タロー、

村祭りの出しものは決まったかい？」

「タロー 「え、うーん。まだです」

おじさん 「大変^{たいへん}だろうけど、たのむぞー！」

おじさんがそう言うって過ぎ^すたあと、

「タローがつぶやきました。」

「タロー 「こまったなあ」

ぬく



二人は、海べりにある工事現場にやってきました。

「タロー」 「ここに新しい広場ができるの。」

だから、村のみんなが楽しみにしている
村祭りも復活するんだよ。」

キュウスケ 「そうなんだ。おじさんが言っていた出し物って…」

「タロー」 「ぼくとポンタにも何かして欲しいんだって。
でも、この場所だとポンタがね。
いいアイデアはあるんだけどな」

キュウスケ 「どんなアイデア？」

「タロー」 「ポンタが村のみんなに化ける、物まねショーを
やるんじゃないかな。キュウスケは化けるのは得意。」

キュウスケ 「ぼぼぼ、ぼくはダメ、化けるのダメ」

それは秘密にしておきたいくらいにキュウスケの弱点です。

「タロー」 「そうなの？じゃあ、ちょっとひとまわし」

—— へびくぐり ——

◆急に聞かれてときどき

◆少しあきた感じ



キュウスケたちは大きな杉すぎの木の下にやってきました。

「タロー みんな、こいで村祭りの練習しているんだ。」

この曲は動物村音頭おんどだよ。」

♪ビビビ ビビビビビビ ビビビビ ビビビビビビ

キュウスケ 「わー、上手ー！」

「タロー でしょう。みんな、最初さいしゆは下手だったんだ。」

でも、村祭りが大好きだいすきだから、ものすごく練習したんだ。」

キュウスケ 「そんなに村祭りが好きなの？」

「タロー うん。みんなでいっしょに何かをするのって

ワクワクするでしょう。大人も子どもも、

わいわいさわいで村中なかやが仲良しになる」

キュウスケ 「そっかあ」

「タロー うん、だからキュウスケもいっしょにやろうよ。」

キュウスケ 「うれしいけど、ぜんぜん自信じゆんがない」

「タロー 大丈夫だいじゆう。最高さいきゆうの先生がいるんだ。さあ行こう」

—— ぬく ——



ポンタ 「ミラクルジャンプ！」

林の中、ポンタの声が響きます。
キュウスケは変身名人のポンタに特訓を受けています。

ポンタ 「うんうん。だいぶよくなってきた」

キュウスケ 「ほんと?」

キュウスケ自身も手ごたえを感じていました。
今までできなかったことが、
少しずつできるようになったからです。

キュウスケ 「でも、ぼくなんかが村祭りにでちゃっていいのかな」

「タロー 「まだそんなこと言って。大丈夫。
みんな大歓迎だよ。な、ポンタ」

ポンタ 「もちろん!まだ時間があるからもっと上手になれるよ」

ぬく

◆息を切らせて
うれしそうに

◆はびますように



いよいよ明日は村祭りの本番です。

キュウスケ 「ダメだ。どうしてもできないよ」

キュウスケの変身術^{へんしんじゆつ}は上達^{じやうたつ}しましたが、
しっぽだけが変身^{へんしん}できません。

「タロー 「そっだー！ポンタ、明日、キュウスケといっしょに
村祭りにでよう。」

ポンタといっしょならきつと大丈夫^{だいじやうぶ}だから。
ね、おねがいー！」

キュウスケ 「ぼくからもおねがいー！ポンタといっしょにやりたい」

ポンタ 「海のそばだとぼくが失敗^{しはい}するかもしれない」

「タロー 「できる。ポンタならできるよ」

ポンタ 「わかった。やってみるよ。」

苦手^{にがて}なんかにまけていられるか！だもんな」

三人はそろって笑^{わら}いました。



村祭りの広場におおぜいの村人たちが集まりました。
オープニングの出しものは、キュウスケたちです。

コタローの司会^{しかい}で、ふたりが登場しました。

赤いハッピーがキュウスケで、緑のハッピーがポンタです。

コタロー 「それでは、ダブルポンポコの

物まねイリュージョンです」

一生けん命練習したキュウスケたちは、
次々と村人たちに化けていきます。

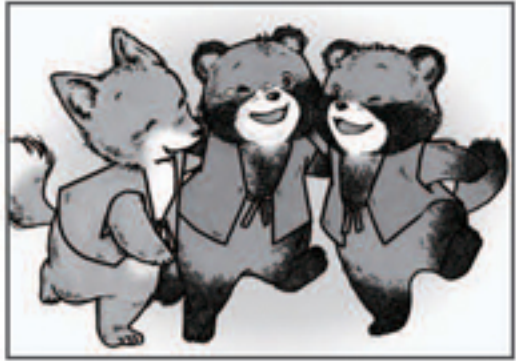
ふたりの上手な変身^{へんしん}に、村人たちは大もりあがり。

コタロー 「次は、最後^{さいご}の変身^{へんしん}！ミラクルジャンプ！」

村人 「うわあ。ポンタがふたりになったー！」

「どっちがどっちか分からないな」

ぬく



物まねイリュージョンは大成功^{だいせいこう}でした。

キュウスケ 「おもしろかった。ぼく、化けるのが好き^すになった。

この村も大好き^{だいす}。ありがとう」

ポンタ 「ぼくのほづこぞ、ありがとう。

海のそばにいても大丈夫って、ちょっと自信^{じしん}がついた。」

「タロー 「あは。それならまた魚つりにいけるかな。

今度はキュウスケもいっしょだね」

キュウスケ 「うん、いきたい！

でもその前にもっとお祭りを楽しみたい」

「タロー 「それじゃあもっと楽しもうー！

三人は村祭りの輪^わの中に飛びこんでいきました。

ピーポロロ ピーポロロ ピーポロロ

「動物村音頭^{おんど}」。

もうキュウスケも歌えるようになっていました。

おしまい